

1. 高所登山の実践と今後の課題

高所登山の展望

大 宮 求

世界各国のヒマラヤ等における高所登山は、ラインホルトメスナーの、ヒマラヤ8,000m峰14座完登や、それにつづく、トモ・チェセンによるローツェ南壁登攀の後、今ひとつ、スカッと心ワクワクするようなエキスペディションや、登攀が見い出せていないのが、現状だと思う。

ここ数年、私個人としても「命、金、仕事」を犠牲にしてまで出かける、何か燃える対象（ヒマラヤ）を見いだしかねていた。

'88年の日中ネ三国友好チョモランマ登山隊に、隊員として南側（ネパール、サガルマータ）に参加した私は、隊としても個人としても余力を残しての下山に、少しもったいないという気持ちももっていた。

そこで、帰国後北京の中国登山協会に、数年後チベット側よりのチョモランマへ数人で行きたいので、許可をほしいと申請したら、'91年の春に東北東稜なら空いているからOKという返事ももらった。

しかし、私の所属する山学同志会では、今もばりばり、ヒマラヤに行こうというメンバーは、数人しかいないため、困っていた。そうこうしているうちに、私どもが中心になってお手伝いしている、日本山岳協会主催の、大学セミナーハウス（八王子）における、海外登山技術研究会に、当時ソ連のアルマータから、ハンテングリ・インターナショナルサマーキャンプの広報活動に、エベレスト南西壁を新ルートより登頂している強力なアルピニストの、カズベクバリエフ氏が見える事になり、チャンスとばかり、夕食後のパーティーのときに、ソ連チームと合同登山をしないかと声をかけてみた。

そしたら以外にも、ふたつ返事で、OKとなった。

これで隊としては実力のあるメンバー、スタッフ（ソ連側のみ）はそろったが、資金のめどが立たず、試算すると、日本人メンバー1人あたり、ゆうに300万円をこしそうなので、資金調達をはかるため、遠征計画を1年延期した。

丁度、この当時の海部総理と橋本大蔵大臣の強力な提案で、スポーツ振興基金制度の発足を見、山岳部門も対象（国際的に卓越したスポーツ活動）になるとの事で資金面の弱い私どもの隊も、出かけられる事となる。

私の'88年夏頃の個人的発案から、'92年春の遠征実施までの、3年半の間に、ソ連は、USSRからCISに、それからカザフスタン独立と、一時はエアメールも戻ってくるほどの通信事情の中で、ひたすらカザフスタン（旧ソ連邦の中でも昔から最強と言われていた。）のメンバーと組んで登りたいという情熱のみで、ねばり、出かける事ができた。

合同隊を組んでみて、わかった事は、クライミングルートとメンバーの実力や、所属国をうまくバ

1. 高所登山の実践と今後の課題

ランス良く組みあわせる事により、頭打ち感のあったヒマラヤ遠征登山を、多様に変化させて、おもしろくできるという事であった。

一般的に日本人は、インターナショナルな事で、オーガナイズする能力に欠けている感があるが、それは、能力がないのではなく、やってみようという情熱と気持ちがなかっただけであると思う。

結果として、私たちの合同隊は働きすぎによって、カザフスタン1名、シェルパ1名の高所障害を起こし、アタック時期の遅延、アタック時、日本隊員（星学君）の事故死と、頂上には達する事ができなかったが、日本、カザフスタン双方はもとより、シェルパ、中国側スタッフとも充実した2ヶ月間の合同遠征登山活動をする事ができた。

私どもの登山隊をひとつのヒントに、国境による大きな障害はもはやなくなったと、お考えいただき、心燃える高所登山にひとつ展望を見いだしていただきたいと思います。

(チョモランマ東北東稜登山隊長)